

# JSEKM 情報交換 2016

—電子オルガン、ML（ミュージック・ラボラトリー）、タテ線譜メソッド、海外情報—  
発表者

電子オルガン：柴田 薫（昭和音楽大学）、ML：脇山 純（平成音楽大学）、  
タテ線譜：和智 正忠（医学・音楽研究者）、海外関連：阿方 俊（昭和音楽大学附属音楽・バレエ教室）  
進行：阿方 俊（昭和音楽大学附属音楽・バレエ教室／文責）

昨年まで、大会の目玉として電子オルガンやハイブリッドオーケストラによる「研究コンサート」を開催してきましたが、今年度から、参加者全員が電子キーボード音楽の表現・教育・理論に関する情報を広く共有するという趣旨で「研究コンサート」は新しく「JSEKM 情報交換」に変わりました。本年度は3分野（電子オルガン、ML《ミュージック・ラボラトリー》、タテ線譜メソッド）と海外関連が報告されました。今回、本学会がどのような方向と内容で活動しているのかを横断的に知る機会になったものと思われます。

以下、各分野とも全体会に当たるパネルディスカッションまたはラウンドテーブルと研究発表および海外情報に関する要約です。

## 1. 電子オルガン部会（柴田 薫）



パネルディスカッションは、電子オルガンの教育楽器としての可能性—電子オルガンの裾野を広げる試み—のテーマで行われた。以下、3名のパネリストの発言ポイント。

西山淑子：エレクトーン伴奏によるピアノ初心者のためのコンチェルトによるアンサンブルの有用性を述べ、これがきっかけになりピアノ関係者がエレクトーンに興味をもってくれることを願う。

小林ひとみ：電子オルガンにはヤマハ、カワイ、ローランド、 Hammondなどの楽器がある。自分はカワイのドリマトーンを持っているので、他社の楽譜を使う場合、この楽器でどのように弾いたらよいかというメーカーの壁を超えた考え方の必要性に言及。

高橋 豊：電子オルガンはオーケストラの代用でなく、第3のカテゴリーとして捉えるべき。教育として閉鎖性から開放されたチームティーチングの必要性を強調。

パネルディスカッションは、今われわれにできることは何かで盛り上がった。研究発表は3名が発表。

森松慶子：ライブ演奏とスピーカーの配置に関し、ホールでの音空間をどのように作り上げていくべきかについて発表。現在までのコンサート例と学会誌に投稿してきたことの発展として、スピーカーとホールに関するワークショップを提案。

金銅英二：高度経済成長期における電子オルガンの象徴として、 Hammondオルガンの最高機種 X-66（1967年）の電子オルガン史での位置づけを挙げ、現在もオーナーズ・クラブが存在する状況を紹介。皆が憧れをもつ21世紀型の新たなフラッグシップモデル（最高機種）の出現を期待したいと結んだ。

前澤 陽：ベルリンフィルと人工知能合奏技術によ

る共演の試みとして先端技術分野を解説。その実際の姿として、リヒテルの生前の演奏をベルリンフィルのシャールン・アンサンブルが先端技術を駆使して行ったライブ演奏の映像を紹介。人間がどのようにして合奏しているのかを研究していることに刺激を受けた。（電子オルガン部会、ML部会共通の研究発表）

## 2. ML 部会（脇山 純）



ML のパネルディスカッションは、「電子キーボードと ICT を活用する音楽教育」のテーマで、小学校、中学校、短期大学で教鞭を取る3人のパネリストを中心に展開された。

小梨貴弘：小学校の音楽授業で ICT を活用する目的の説明に続き、6つの具体的活用例の解説。コンピューター、タブレットの使用でタイムリーな指導が可能になり、指導効率が上がることを説明した。

上出美希：中学校におけるタブレット端末の効果的活用を目指して、グラフィックを用いた音楽の創作実践を説明。イメージを絵にして、それに合わせた音楽を作り、動画ソフトで動きを加えることを具体的に提示した。

田中功一：ピアノ演奏の見える化を活用する学習ポートフォリオ（総合的学習評価方法）の試みとして、「演奏見える化ツール」を使った保育・教員養成校のピアノ初心者が自分で学習をするための支援システムの実践報告。またこれらの情報を教員が把握することにより、対面授業の質的向上に寄与できることも言及。

以前から話題になっているが、今回のパネルディスカッションを通して、ML 部会の名称が時代対応しているかどうかを検討する時期ではないかと思われた。

ML 部会の研究発表は2名で行われた。

マーク・マンノ：アメリカの音楽ソフトウェア（Mac GAMUT6）による基礎楽典および聴音学習の強化というテーマで台湾の東海大学での活用結果を説明。このソフトの利点は、学習者のレベルに合わせて使うことで勉強できることにあり、パネルディスカッションのピアノの見える化に通じるものがある。

石川裕司（小林恭子）：ミュージカル創作における ML の活用というテーマで、今までと異なった ML の使い方を試みた。楽曲「手のひらを太陽に」をもとにしたミュージカルの創作活動を行い、その成果を ML の多重録音機能を中心に実践・発展した。ML 教室のキーボードはヤマハ CVP701。

\*共同発表者の小林恭子会員が欠席のため、発表は石川会員が行った。なお3番目の研究発表は、電子オルガン部会と合同で行われた。

## 3. タテ線譜メソッド部会（和智 正忠）



今年度のラウンドテーブルのテーマは「タテ線譜メソッドとは何か - II」で、昨年度のIに続くもの。今年は、昨年のタテ線譜メソッドに関する人たちとの情報交換から一歩進んで、実践に関係する人たちを中心とした

「実証結果」を踏まえたものが多くなった。進行は以下の順序で行われた。詳細は報告書の「研究報告」「ラウンドテーブル」参照

1) 司会者あいさつと参加者自己紹介

司会者の昨年度と今年度のテーマIとIIの違いの説明後、出席者22名の自己紹介

2) 齋藤康之准教授(木更津高専)のタテ線譜の試み

タテ線譜と五線譜との鍵盤導入比較を小中学生などを対象に自動伴奏装置を併用した方法で実験・発表

3) タテ線譜メソッド講座受講生の現状報告

昭和音大附属教室のタテ線譜講座受講生7名の演奏(DVD)およびコメント 4)

タテ線譜メソッド講座指導者の現状報告

秋谷万里子(和幸楽器店)、垣浪文美香(東京学芸大附属大泉小)、安武 秀(平成音大)。5)

タテ線譜メソッド講座以外の参加者の情報提供

大学の研究者、ピアニスト、楽器会社、楽器店、老人ホーム関係者などバラエティに富んだ人たちが参加 6.まとめ(和智正忠アドバイザー)

研究発表の秋谷万里子(和幸楽器店)、垣浪文美香(東京学芸大附属大泉小)、稲原文江、大庭美奈子、島田美智子、藤井京子(jet)は、報告書「研究発表」参照

4. 海外情報(阿方 俊)

中国では今、日本の高度経済成長期に見られた大規模な電子オルガンコンクール(コンペティション)が開催されている。またシンガポールでは、ピアノ科学生によるエレクトーンオーケストラがデビューして高い評価を得た。日本からの海外関連としては、日中音楽文化交流

「第5回サマーミュージックキャンプ in 東京」が開かれている。ここでは、これらのコンペティションや催しに参加した学会員のインタビューを交えて「場所」「日程」「一口コメント」で紹介した。

1) 中国における電子オルガン

ヤマハ中国では従来行ってきた電子オルガンコンクールを2015年(ファイナルは2016年6月、星海音楽学院)から「ヤマハ電子鍵盤コンクール」とし、電子オルガン、電子ピアノ、電子キーボードの3部門で開催。予選は全国90会場、12,000名が参加した。(ヤマハ中国丸山涼路営業部長情報)。



リングウェイ(中国製電子オルガン)は、8月に常州大劇場で第5回目のコンペティションを開催。ここでの特記されるべきこととして、オルガン部門があることに加え

て、音楽学院(日本音大に相当)の協力でコンクール(コンペティション)が開催されていることが挙げられる。池田皓一(アトリエ音楽教室。写真右)

2) 第5回電子オルガンのためのサマーミュージックキャンプ 2016 in 東京



サマーミュージックキャンプ実行委員会主催で、8月に昭和音大、新宿村スタジオ、オリセン(オック総合記念センター)で第5回目のキャンプが行われた。このキャンプの

特長として、レッスンカルテによるレッスン結果のフィードバックがあり、参加者との相互理解を深めている。小熊達弥(サウンド・インターフェイス、写真左)と李奥軒(昭和音大)

3) 北京国際パイプ&電子オルガン学術フォーラム in 中央音楽学院



これは中国の芸術系音楽学院で唯一の[国家重点大学](#)である中央音楽学院が9月に同学院が主催した協力団体はヤマハ

音楽振興会、昭和音大、聖徳大、洗足学園音大。講師はオランダ、カナダ、日本から招聘され、学会員としては赤塚博美(洗足学園音大)

音大)がコンサートで演奏している。中国ではパイプオルガンと電子オルガンを共に学習するなど両者の共存姿勢が特長となっている。北條哲男(東京藝大)

4) 国立ヤンシュウタオ音楽院 EL オーケストラ



現在、中国、ベトナムなど共産圏を除き、国立音大で電子オルガン科はない。シンガポールでは国立ヤンシュウタオ音楽院が創立10周年を記念

して10月から11月にかけてコンサートやシンポジウムを開催。その中でエレクトーン未経験のピアノ科学生が主体となったエレクトーンオーケストラ(8台のステージ-02)による演奏会が話題になった。その理由の一つは、モーツァルトのピアノ協奏曲第24番をオケスコアで5日間の練習で演奏したことにある。

指揮: 郭宗愷(台湾・東海大学ピアノ科教授 写真左)、ピアノ: Thomas Hecht(アメリカ人。ピアノ科主任)

5) 中国電子オルガン科設置校教育連盟設立大会

中国では1990年代初めに中国音楽家協会電子オルガン学会が設立され、今では省単位の学会がある。

2016年11月17~19日、上海音楽学院で、中国の学校を単位とした電子オルガン科設置校による教育連盟が設立された。このような教育組織は日本を含め他の国にはない。現在連盟には110校(理事校9校、会員校101校)が所属する。

(写真提供: 金銅英二)